

## 東大EMP第12期プログラム 最終報告発表 概要

(2015年3月7日)

チーム・メンバー	課題テーマ	タイトル	概要
<p>[チーム1] 牛田 圭一 亀井 誠 小林 正典 高橋 威一郎 前田 浩司</p>	<p>健康的で活力のある 超高齢化社会経営</p>	<p>高齢者と地域の縁結び 「ふるさとユニット経営」の 全国展開</p>	<p>超高齢化社会をどう経営するか、日本が直面している大きな課題である。将来に対する国民の不安が増す中で、国や地方自治体は、医療・介護体制などナショナルミニマムの確保に向けて本格的に取り掛かっているが、医療・介護人材の不足や、今後増大する社会保障費など課題が山積である。</p> <p>こうした現状認識の下、我々は、現場目線で本質的な中核課題とソリューションスペースを設定し、家族のあり方、価値観の多様性、ローカル経済の拡大、競争原理等の視点から、地域共同体ともいふべき「ふるさとユニット」に解決への道筋を見出し、これを全国展開することにより、健康で活力のある超高齢化社会を日本全体として経営できるのではないかと提案する。</p>
<p>[チーム2] 小出 隆太郎 小西 崇文 迎 堅太郎 山口 仁 湯口 達夫</p>	<p>資源・エネルギー活用 の規律による環境保 全</p>	<p>日本の水産資源保全戦略 ～孫にも「おまかせ」を食わ せたい！～</p>	<p>「今後、百年程度では資源は枯渇しない」。そのような考え方がある中で、持続的活用に向けた取組が最も求められる資源とは何か？持続可能な発展に関するハーマン・デイリーの3原則と日本の影響度を評価軸に、我々が導き出した資源は、「水産資源」。</p> <p>「2048年には海洋生態系が壊滅する」との調査結果が、海洋生物学の専門家らによって報告されている。しかしながら、地球温暖化による環境変化に対する海洋生物の応答は、いまだ十分には解明されていないのが現実。今分かっているのは、生物学的に持続可能な水準を超えた過剰漁獲の状態にある水産資源が、40年前の3倍近くに増えている、ということ。</p> <p>我が国は、国土の多くが温暖湿潤気候に含まれ、また、豊かな漁場を有しているため、米と魚を中心とする食生活が形成されてきた。我が国を取り囲む多様性に富んだ海域は、地域ごとに特色のある「魚食文化」を生み出してきた。「魚食文化」とは、単に魚を沢山食ふことや食卓に魚が並ぶことだけではなく、調理方法や調理道具、品質を評価する目利き、魚を獲る技術や処理・保存技術など多様な分野に及ぶもの。魚を中心とした食生活の中で知識・智慧として受け継がれ、蓄積されてきたもの全体が「魚食文化」である。「孫にも『おまかせ』を食わせたい」。そんな思いで、我々はこの課題に取り組んだ。</p>

<p>[チーム4] 奥 愛 駒田 浩志 白木 紀子 中西 健太郎 早田 勇二</p>	<p>多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立</p>	<p>多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立</p>	<p>宗教や文化の違い、異なる民族や経済格差など、これまで人類が多様であることが起因となって多くの人命が失われてきた。我々は、これら多様性を踏まえ、人間が共存していくための共通行動規範を検討した。いかなる宗教、文化、政治の下にいる人でも最低限守らなければならない規範として、他人の生存権を侵害しないことを重視した。さらに、これまで紛争・対立が止むことがなかった理由を分析した上で、人間が共存していくための共通行動規範を提案する。この共通行動規範の実効性を上げるため、具体的な提案を行うとともに、最終的に我々が目指すべきものを示す。</p>
<p>[チーム5] 赤池 弘友紀 上坪 淳一 鈴木 宏治 高柳 大 早川 友歩</p>	<p>先端科学・技術の効用と新世界観の形成</p>	<p>先端科学・技術の効用と新世界観の形成</p>	<p>自然科学においては、観測技術の進歩がもたらす新たな事実に基づき、帰納やアブダクション(仮説形成)による理論の構築、新たな予測や他の対象への適用・検証を経て、科学的な「知」の体系が構築されてきた。</p> <p>先端科学の知見が人間社会にもたらした効用は計り知れないが、科学の社会実装が社会に与えるインパクトも経験から予見できない領域に入りつつある。特に生命科学では、ゲノム科学が医療の飛躍的な進化をもたらす一方で、命の選択やヒトクローンなど人間の尊厳や生きることの意味が問われる地平まで来つつある。</p> <p>そこで我々が感じる漠然とした不安は、自然科学が置き去りにしてきた一方で、宗教や哲学でも未だ説明できない「我々は何のために生きるのか」という根源的問いに根ざしており、科学の社会実装において意味や目的を問い直す人間的な営みはその重要性を増している。</p> <p>かかる状況において、人間社会に効用をもたらす科学技術を今後も力強く推進させていくために、科学技術を社会実装する際のソフトフェンスをいかに構築していくべきか、最新の自然科学のアプローチからどのような新機軸を自然科学の分野に取り込んでいくべきかを生命科学の進展をベースに提言したい。</p>

<p> <b>[チーム6]</b>            小野塚 勝俊            鎌田 俊一            鯉淵 健            田上 英樹            田中 誠一            廣瀬 修         </p>	<p>日本の先進課題設定とその解決能力向上</p>	<p>日本流リーダーシップによる先進課題の解決</p>	<p>           「日本の先進課題設定」というテーマはともすると、日本に限定された課題や海外と日本の比較論、そして普段から考えていることの単なる取りまとめに陥りがちである。そこで我々は、「日本の良さを生かしながら、世界の課題解決のためのロールモデル的良循環を生むことが出来るのか？」という問いへと拡張して検討を行った。         </p> <p>           世界の課題解決への貢献において、日本は決められた枠組みの中や準備された場の範囲内において、一定の役割を果たしている。しかしながら、その取り組み姿勢はどちらかと言えば受け身であり、国の規模や技術力、さまざまな経験に培われたポテンシャルに見合ったイニシアチブが取れているとは言い難い。         </p> <p>           本検討では、日本の強みとして真っ先に浮かぶ、経済力、科学技術といったものだけでなく、世の中に蔓延しつつある利己主義に、日本人の「言葉では言い尽くせない五感で感じる価値観や美意識」を埋め込んでいくことによって、世界の課題解決のきっかけとしていくソリューションを提案する。         </p>
---	---------------------------	-----------------------------	---